

令和 5 年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国 語

試験時間 50 分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全 13 ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄^{らん}に記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者^{かんとくしゃ}に知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を提出してください。
- 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとします。

受験番号	氏 名

一

次の各問いに答えなさい。

問 1

次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 血眼けんになつて、無くしたものを探す。
- ② 彼は在学中に多くの作品を著かくした。
- ③ 部費の管理をするため、出納帳をつける。

問 2

次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① これからたくさん親コウコウをするつもりだ。
- ② 彼のデザインには、センレンされた美しさがある。
- ③ 災害に備えて食料をチヨゾウしておく。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

なぜ人類は首長や王といった政治リーダーを必要としてきたのか？　ここまで南米先住民、メラネシア、アフリカといった、さまざまな時代や地域に共通するリーダー像をたどってきた。そこからみてきたのは、リーダーは集団のために、集団に貢献する（こうけん）かぎりにおいて、ある種の特権や権威を一時的に集団から託（たく）されているにすぎない、ということだ。まさに「主権在民」や「公僕」といった言葉を想起させる。

フランスの人類学者ピエール・クラストルは、アメリカ先住民アパッチの首長ジェロニモの物語を紹介している（『国家に抗する社会』）。メキシコ軍から襲撃（しゅうげき）され、ジェロニモの家族も皆殺（みな）しにされた。アパッチは、虐殺（ぎゃく）への復讐（しゅう）を誓（ちか）い、その戦いの指揮を勇敢な戦士だったジェロニモに託す。戦いはアパッチの大勝利に終わった。映画や小説にとりあげられ（マンガ『キン肉マン』にもでてくる！）、白人への抵抗戦争の英雄として知られるジェロニモだが、話はそこで終わらない。

アパッチにとって「復讐」は勝利によって成し遂げられたが、ジェロニモは、さらなる復讐を欲し、あらたな遠征に仲間を誘う。しかし、さらなる復讐は、もはや集団の目標ではなく、ジェロニモの個人的目標に変わっていた。^①その欲望は人びとに拒絶（きょ）される。ときに嘘（うそ）までついて栄光と戦利品に目がくらんだ若者が何人か引きこまれたが、わずかに戦いに参加しないこともあった。

クラストルは、戦士としての能力で民族の道具^②となったジェロニモが、今度は民族を彼の道具にしようとして失敗した、という。「北米最後の偉大なる戦争の首長」であるジェロニモが英雄になれたのは、集団の目的に貢献しうるあいだけだったのだ。

首長がやがて支配権力をもつ王になるわけではない。クラストルは、未開社会の首長^③という存在が「専制王」とはまったく別物だと強調する。

首長は、一切の権威、一切の強制力、一切の命令を下す方途（と）を欠くということ以外の何ものでもない。首長は、命令を下す者ではなく、部族の者は何ら服従の義務はない。首長制の空間は権力ではなく、「首長」（この呼び方も適切とはいえない）の形象は、来たるべき専制王の姿を先取りするものではない。（同二五六頁）

ここでも首長のいうことにだれも服従の義務がないことがわかる。権限をもたない政治リーダー。なぜそれが可能なのか、権限をもつことがリーダーの条件だという常識にとらわれているばかりには想像しがたい。そもそも権限もないのに、なぜ「首長」という地位が必要なのか。いったいそこにどんな意味があるのか。クラストルは、首長の役割についてこう説明する。

首長は、個人どうし、家族間、リニジ〔出自集団〕間に生じうる係争を解消することを任務としており、秩序と協調をとりもどすのに、社会が彼に認めている威信以外に手段をもっていない。だがもちろん威信は権力を意味するものではなく、首長が調停者としての責を果すのに有する手段は、言葉の独占的使用に限られているのだ。（同二五七頁）

首長は裁判官ではない。対立する陣営に調停案を示したり、どちらかに肩入れして擁護したりするわけでもない。そういう意味では弁護士とも違う。首長はその弁舌で人びとに平静をとりもどし、非難の投げあいをやめるよう訴える。互いに理解しあい平和に暮らしていた祖先をまねるよう説得する。そこでの道具は「X」だけだ。

首長は社会のなかで生じるさまざまな問題を解決するための役割を担う。威信と言葉以外につかえる強制力をともなう手段はもたない。日本だと、白か黒か、はつきり決断を下すのがリーダーの役割だと考えられている。「決められる政治」が政治家のキャッチフレーズとしてもてはやされるくらいだ。

だが、リーダーが決断して意思決定するだけであれば、それは民主主義とはほど遠い^④。首長たちは弁舌によって人びとを説得し、納得させようとする。つまり決断を下すのではなく、人びとの同意をえることがリーダーの仕事になる。それは、みなが同意できる状況をつくれなければ、集団としてのまとまりを維持できなくなるからだ。

それが冒頭の「同意」の問題につながる。レヴィ・ストロースは、「同意」こそが権力の源であると同時に、その権力を制限するものだといった。それはあきらかに民主主義の理念そのものだ。本来なら、国民が納得できる言葉をもたず、同意をえるどころか、発言するたびに失望させるような者に政治家の資格などない。

政治家が主権者によって選ばれ、その同意の範囲で政治的な役割をはたす。それを真の意味で実践していたのは現代の民主主義をかかげる国家ではなく、「未開社会」とされた国家なき社会だった。

人びとは、リーダーが集団の目標に貢献しているのか、つねに関心を寄せ、そこから道をはずれると、さっと同意を翻す。国家が人びとを監視する監視社会とは逆に、リーダーがつねに人びとから監視されているのだ。

（松村圭一郎『くらしのアナキニズム』）

問1 ぼうせん部①「その欲望」とあるが、どのような欲望か。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 家族を皆殺しにしたメキシコ軍に報復したいという欲望。
- イ 弱小な集団が強大な敵に勝利したいという欲望。
- ウ リーダーとして戦い、仲間を英雄にしたいという欲望。
- エ あらたな遠征に向かい、戦利品を獲得したいという欲望。

問2 ぼうせん部②「民族の道具」とはどういうことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 民族の目標のために、個人の目標を切り捨てるということ。
- イ 民族の目標のために、個人の能力を発揮するということ。
- ウ 民族の目標のために、服従の義務を課されるということ。
- エ 民族の目標のために、特権を一時的に託されるということ。

問3 ぼうせん部③「未開社会の首長」とあるが、どういう存在か。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 平和に暮らせるように人々を監視できる存在。
- イ 集団の誇りのために人々を説得できる存在。
- ウ はっきりと決断を下すことができる存在。
- エ 人々の同意をえることができる存在。

問4 空らん X に入る語句として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉
- イ 権威
- ウ 民族
- エ 政治

問5 ぼうせん部④「それは民主主義とはほど遠い」とあるが、そう言えるのはなぜか説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

数日後、父からバスの回数券をもらった。「十分で十一回乗れるから、こっちのほうが得なんだ」——十一枚綴りが、二冊。

「だいじょうぶだよ」父はコンビニエンスストアの弁当をレンジに入れながら、少年に笑いかけた。「これを全部使うことはないから」

「ほんと？」

「ああ……まあ、たぶん、だけど」

足し算と割り算をして、カレンダーを思い浮かべた。再来週のうちに使いきる計算になる。

「ほんとに、ほんと？」

低学年の子みたいにしつこく念を押した。父は怒らず、かえって少し申し訳なさそうに「だから、たぶん、だけどな」と言った。

電子レンジが、チン、と音をたてた。

「よし、ごはんだ、ごはん。食べるぞっ」

父は最近おしゃべりになった。なにをするにもいちいち声をかけてくるし、ひとりごとや鼻歌も増えた。

お父さん X、と少年は思う。

回数券の一冊目を使いきる頃には、バスにもだいぶ慣れてきた。

「毎日行かなくてもいいんだぞ」

父に言われた。「宿題もあるし、友だちとも全然遊んでないだろ？ 忙しいときや友だちと遊ぶ約束したときには、無理して行かなくてもいいんだからな」——それは病室で少年を迎える母からの伝言でもあった。

母は自分の病気より、少年のこのころのほうをずっと心配していた。自転車でお見舞いに行きたくても、交通事故が怖いからだめだと言われた。バス

で通っていても、病室をひきあげるときには必ず「降りたあと、すぐに道路を渡っちゃだめよ」と Y のだ。

「だいじょうぶだよ、べつに無理してないし」

少年が笑って応えると、父は少し困ったように「まだ先は長いぞ」とつぶけた。「昼に先生から聞いたんだけど……お母さん、もうちよつとかかりそうだって」

「……もうちよつと、つて？」

「もうちよつとは、もうちよつとだよ」

「来月ぐらい？」

「それは……もうちよつと、かな」

「だから、いつ？」

① 父は少年から目をそらし、「医者じゃないんだから、わからないよ」と言った。

二冊目の回数券が終わった。使いはじめるとあつけない。一往復で二枚ずつ——一週間足らずで終わってしまう。

まだ母が退院できそうな様子はない。

「回数券はバスの中でも買えるんだろ。お金渡すから、自分で買うか？」

「……一冊でいい？」

② ほんとうは訊ききたくない質問だった。父も答えづらそうに少し間をおいて、「面倒どうだから二冊ぐらい買つとくか」と妙みょうにおどけた口調で言った。

「定期券にしなくていい？」

「なんだ、おまえ、そんなのも知ってるのか」

「そっちのほうが回数券より安いんでしょ？」

定期券は一カ月、三カ月、六カ月の三種類ある。父がどれを選ぶのか、知りたくて、知りたくなくて、「定期って長いほうが得なんだよね」と言った。

「ほんと、よく知ってるんだなあ」父はまたおどけて笑い、「まあ、五年生なんだもんな」とうなずいた。

「……何カ月のにする？」

「お金のことはアレだけど……回数券、買つとけ」

父はそう答えたあと、「やっぱり三冊ぐらい買つとくか」と付け加えた。

次の日、バスに乗り込んだ少年は前のほうの席を選び、運転席をそつと覗のぞき込んだ。あのひとだ、とわかると、胸がすばまった。

初めてバスに一人で乗った日に叱られた運転手だった。その後も何度か、同じ運転手のバスに乗った。まだ二冊目の回数券を使いはじめたばかりの頃、整理券を指に巻きつけて丸めたまま運賃箱に入れたら、「数字が見えないとだめだよ」と言われた。叱る口調ではなかったが、それ以来、あのひとのバスに乗るのが怖くなった。たとえなにも言われなくても、運賃箱に回数券と整理券を入れてバスを降りるとき、いつもムスツとしているように見える。

嫌だなあ、運が悪いなあ、と思ったが、回数券を買わないわけにはいかない。『大学病院前』でバスを降りるとき、「回数券、ください」と声をかけた。

運転手は「早めに言ってくれないと」と顔をしかめ、足元に置いたカバンから回数券を出した。制服の胸の名札が見えた。「河野」と書いてあった。

「子ども用のでいいの？」

「……はい」

「いくらのやつ？」

「……百二十円の」

河野さんは「だから、そういうのも先に言わないと、後ろつつかえてるだろ」とぶつきらばうに言っ、一冊差し出した。「千二百円と、今日のぶん、運賃箱に入れて」

「あの……すみません、三冊……すみません……」

「三冊も？」

「はい……すみません……」

大きくため息をついた河野さんは、「ちよつと、後ろのお客さん先にするから」と少年に脇にどくよう顎を振った。

③少年は頬を赤くして、他の客が全員降りるのを待った。お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、と心の中で両親を交互に呼んだ。助けて、助けて、助けて……と訴えた。

客が降りたあと、河野さんはまたカバンを探り、追加の二冊を少年に差し出した。

代金を運賃箱に入れると、「かよつてるの？」と、さつきよりさらにぶつきらばうに訊かれた。「病院、かようんだったら、定期のほうが安いぞ」わかつてる、そんなの、言われなくたって。

「……お見舞い、だから」

かほそい声で応え、そのまま、逃げるようにステップを下りて外に出た。全然とんちんかんな答え方をしていたことに気づいたのは、バスが走り去ってから、だった。

夕暮れが早くなった。病院に行く途中で橋から眺める街は、炎が燃えたつような色から、もっと暗い赤に変わった。帰りは夜になる。最初の頃は帰りのバスを降りるときに広がっていた星空が、いまはバスの中から眺められる。病院の前で帰りのバスを待つとき、いまはまだかろうじて西の空に夕陽が残っているが、あとしばらくすれば、それも見えなくなってしまうだろう。

買い足した回数券の三冊目が——もうすぐ終わる。

少年は父に「迎えに来て」とねだるようになった。車で通勤している父に、会社帰りに病院に寄ってもらって一緒に帰れば、回数券を使わずにすむ。

「今日は残業で遅くなるんだけどな」と父が言っても、「いい、待ってるから」とねばった。母から看護師さんに頼んでもらって、面会時間の過ぎたあとも病室で父を待つ日もあった。

それでも、行きのバスで回数券は一枚ずつ減っていく。最後から二枚目の回数券を——今日、使った。あとは表紙を兼ねた十一枚目の券だけだ。
④ 明日からお小遣いでバスに乗ることにした。毎月のお小遣いは千円だから、あとしばらくはだいじょうぶだろう。

ところが、迎えに来てくれるはずの父から、病院のナースステーションに電話が入った。

「今日はどうしても抜けられない仕事が入っちゃったから、一人でバスで帰って、って」

看護師さんから伝言を聞くと、泣きだしそうになってしまった。今日は財布を持って来ていない。回数券を使わなければ、家に帰れない。

母の前では涙をこらえた。病院前のバス停のベンチに座っていると、必死に唇を噛んで我慢した。でも、バスに乗り込み、最初は混み合っていた車内が少しずつ空いてくると、急に悲しみが胸に込み上げてきた。シートに座る。窓から見えるきれいな真ん丸の月が、じわじわとにじみ、揺れはじめた。座ったままうずくまるような格好で泣いた。バスの重いエンジンの音に紛らせて、うめき声を漏らしながら泣きじゃくった。

『本町二丁目』が近づいてきた。顔を上げると、車内には他の客は誰もいなかった。降車ボタンを押して、手の甲で涙をぬぐいながら席を立ち、ウインドブレーカーのポケットから回数券の最後の一枚を取り出した。

バスが停まる。運賃箱の前まで来ると、運転手が河野さんだと気づいた。それでまた、悲しみがつのった。
⑤ こんなひとに最後の回数券を渡したく

ない。

整理券を運賃箱に先に入れ、回数券をつづけて入れようとしたとき、とうとう泣き声が出てしまった。

「どうした？」と河野さんが訊いた。「なんで泣いてるの？」——ぶつきらぼうではない言い方をされたのは初めてだったから、逆に涙が止まらなくなってしまった。

「財布、落としちゃったのか？」

泣きながらかぶりを振って、回数券を見せた。

じゃあ早く入れなさい——とは、言われなかった。

河野さんは「どうした？」ともう一度訊いた。

その声にすうつと手を引かれるように、少年は嗚咽^{おえつ}交じりに、回数券を使いたくないんだと伝えた。母のこともしゃべった。新しい回数券を買うと、そのぶん、母の退院の日が遠ざかってしまう。ごめんなさい、ごめんなさい、と手の甲で目元を覆^{おお}った。警察に捕^{つか}まってもいいから、この回数券、ばくにください、と言った。

河野さんはなにも言わなかった。かわりに、小銭が運賃箱に落ちる音が聞こえた。目元から手の甲をはずすと、整理券と一緒に百二十円、箱に入っていた。もう前に向き直っていた河野さんは、少年を振り向かずに、「早く降りて」と言った。「次のバス停でお客さんが待ってるんだから、早く」——声はまた、ぶつきらぼうになっていた。

次の日から、少年はお小遣いでバスに乗った。お金がなくなるか「回数券まだあるのか？」と父に訊かれるまでは知らん顔しているつもりだったが、その心配は要らなかった。

三日目に病室に入ると、母はベッドに起き上がって、父と笑いながらしゃべっていた。会社を抜けてきたという父は、少年を振り向いてうれしそうに言った。

「お母さん、あさって退院だぞ」

退院の日、母は看護師さんから花束をもらった。車で少年と一緒に迎えに来た父も、「どうせ家に帰るのに」と母に笑われながら、大きな花束をプレゼントした。

帰り道、「ぼく、バスで帰っていい？」と訊くと、両親はきよとした顔になったが、「病院からバスに乗るのもこれで最後だもんなあ」「よくがんばったよね、寂しかったでしょ？　ありがとう」と笑って許してくれた。

「帰り、ひよつとしたら、ちよつと遅くなるかもしれないけど、いい？　いいでしょ？　ね、いいでしょ？」

両手で拝んで頼むと、母は「晩ごはんまでには帰ってきなさいよ」とうなずき、父は「そうだぞ、今夜はお寿司とるからな、パーティーだぞ」と笑った。

バス停に立つて、河野さんの運転するバスが来るのを待った。バスが停まると、降り口のドアに駆け寄って、その場でジャンプしながら運転席の様子を確かめる。

何便もやり過ごして、陽が暮れてきて、やっぱりだめかなあ、とあきらめかけた頃——やつと河野さんのバスが来た。間違いない。運転席にいるのは確かに河野さんだ。

車内は混み合っていたので、走っているときに河野さんに近づくことはできなかった。それでもいい。通路を歩くのはバスが停まってから。整理券は丸めてはいけない。

次は本町一丁目、本町一丁目……とアナウンスが聞こえると、降車ボタンを押した。ゆっくりと、人差し指をピンと伸ばして。^⑥

バスが停まる。通路を進む。河野さんはいつものように不機嫌な様子で運賃箱を横目で見ていた。

目は合わない。それがちよつと残念で、でも河野さんはいつもこうなんだもんな、と思い直して、整理券と回数券の最後の一枚を入れた。降りるときには早くしなければいけない。順番を待っているひともいるし、次のバス停で待っているひともいる。

だから、少年はなにも言わない。回数券に書いた「Z」にあとで気づいてくれるかな、気づいてくれるといいな、と思いながら、ステップを下りた。

(重松清『カレーライス』『バスに乗って』)

問1 空らん X に当てはまる言葉として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 怒っているんだ イ 寂しいんだ ウ 楽しいんだ エ 嬉しいんだ

問2 空らん Y には慣用句が入る。当てはまる慣用句として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 裏をかかれる イ 鼻を折られる ウ 釘を刺される エ しつぽをつかまれる

問3 ぼうせん部①「父は少年から目をそらし」とあるが、そのときの「父」の心情として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「母の退院時期」というのはっきりわからないことを何回もしつこく聞いてくる「少年」に対し、いらだっている。

イ 「母の退院時期」という医者でもわからないことを聞かれ、「少年」を納得させられる答えが見つからず困っている。

ウ 「母の退院時期」を「少年」が気にする気持ちは痛いほど理解できるが、明確に伝えられないことを申し訳なく思っている。

エ 「母の退院時期」を自分こそ知りたいと思っているのに、「少年」の勢いに押されて自分の気持ちを出せず、落ち込んでいる。

問4 ぼうせん部②「ほんとうは訊きたくない質問だった」とあるが、なぜか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 回数券を購入する冊数が多いほど、母がまだ退院できないという現実を突きつけられてしまうので、冊数を知ることが怖かったから。

イ 回数券を購入する冊数を知ること、かかる交通費の多さに気づいてしまい、お見舞いに行きづらくなってしまうと思ったから。

ウ 回数券を購入する冊数が多いほど、一人でバスに乗らなければならぬ回数が増えてしまうので、孤独感にさいなまれてしまうから。

エ 回数券を購入する冊数を知ること、母がいつ退院するかを探っているのだと父に思われてしまうことが嫌だったから。

問5 ぼうせん部③「少年は頬を赤くして」とあるが、そのときの「少年」の心情として誤っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 回数券を上手く買えなかったことに対する焦り。

イ 他のお客さんに見られていることに対する恥ずかしさ。

ウ 一人で何とかしなければならぬことに対する不安。

エ 全員が降りるまで待たなければならぬことに対する怒り。

問 6 ぼうせん部④「明日からお小遣いでバスに乗ることにした」とあるが、「少年」がその行動を取るのはどのような考えからか、五十字以内で説明しなさい。

問 7 ぼうせん部⑤「こんなひと」とはどのようなひとか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 車内のマナーを必要以上に厳しく取り締まり、注意するひと。
- イ 子どもより大人のことを優先して対応しようとするひと。
- ウ 愛想がなく、仕事のためならば小学生にも容赦なく叱るひと。
- エ 相手がどう思うかを考えず、機械的にしか接することができないひと。

問 8 ぼうせん部⑥「ゆつくりと、人差し指をピンと伸ばして」とあるが、「少年」がこのように降車ボタンを押したのはなぜか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア やつとお母さんが退院したことで晴れ晴れとした気持ちになったため、今は注意を受けなくなかったから。
- イ 最後の乗車になるため、河野さんに言われたことだけでなく、全ての動作を丁寧に行いたかったから。
- ウ もう河野さんが運転するバスに乗れないのかと思うと、降車することが名残惜しくなってしまったから。
- エ バスの運行に影響を与えない範囲で、河野さんに気付いてもらうための目立つ行動をしようと思ったから。

問 9 空らん Z に当てはまる「少年」の言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア もうだいじょうぶです
- イ ありがとうございます
- ウ また会いたいです
- エ ごめんなさい

四

次の各問いに答えなさい。

問1

①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① 井の中の蛙^{かわず}□を知らず

ア 大空 イ 大海

ウ 大雨

エ 大蛇^{じゃ}

② □で鯛^{たい}を釣る

ア 釣り竿^{さお} イ 金

ウ 餌^{えさ}

エ 海老^{えび}

問2

次の空らんには当てはまる言葉を後から選び、記号で答えなさい。

① () 弁が立つからこそ、彼はうそをつく。

ア やおら

イ なまじ

ウ いちがいに

エ ちやほや

② 家族の病状が()。

ア かんばしくない

イ おこがましくない

ウ つつましくない

エ よそよそしくない

問3

ぼうせん部と意味・用法が同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

祖母の家の庭に咲いた花がとてもきれいだ。

ア 姉が三週間の海外留学から帰ったところだ。

イ この黄色と黒の靴はタロウさんのものでしたね。

ウ 部屋に飾った『モナ・リザ』の絵がこちらを見ている。

エ 先週、全国大会出場をかけた試合に惜しくも負けた。

以下余白

